２０２３年４月３０日「いのちのパン」　青戸教会　　高橋克樹牧師

聖書　出エジプト記１６章４～１６節、ヨハネ福音書６章３４～４０節

本日与えられたヨハネ福音書６章３４節以下を学ぶ上で前提になっている箇所から学び始めたいと思います。６章冒頭でイエスはガリラヤ湖の向こう岸に渡られると群衆が後を追ってきたので、その群衆５０００人に食べ物を与える奇跡を行います。その翌日、群衆はイエスの動きを観察していました。弟子たちだけが舟に乗り込んでガリラヤ湖の向こう岸に向かったはずなのに、そこにイエスの姿がなかったのです。すると、そこにティベリアスから数艘の舟がやってきたので、これ幸いと群衆はそれらの舟に乗り、イエスを捜しにカファルナウムに向かいました。そこでイエスに出会います。

ところが、そこでイエスは群衆がご自分のところに来た本心を見抜いて『あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ人の子があなたがたに与える食べ物である。』（２６～２７節）と言って、イエスを捜しに来た群衆の動機の不完全さを指摘するのです。それに対して群衆も、指摘されたことに対して正確な反応をするのです。『神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか』（２８節）と言って、確かに自分たちはパン５つと魚２匹で５０００人が満腹した奇跡を目の当たりにしたことで、イエスを捜してやって来たけれども、満腹したことだけでイエスを捜しに来たわけではない。目の前の空腹を満たすためだけでイエスを捜しに来たわけではないことは群衆の皆が感じていたことなのです。自分が何のために生きているのかを明確に知っていなければ、ただ生きているだけでは人生に意味は見出せないことは皆承知しているのです。だから、「神の業を行うために何をしたらいいのか」をイエスに聞いたのです。ここで、神の業を行うというのは、自分が何のために生きるかを知ることを指しています。私たち日本人の多くは自分が無宗教だと考えていますが、イエスの時代の人々は、自分がヤハウェの神を信じていることを大前提にしていますから、生きる意味は神が自分に求めている業をどのように日常生活の中で実現するかを考えるのが当たり前の世界観で生きていました。ですから、「朽ちない食べ物のために働きなさい」と言われて、
朽ちない食べ物と言うのは、神によってもたらされる永遠の命だということは皆がすぐ承知できたことなのです。だから、永遠の命を得るためにどのような神の業をするのが良いのかを聞いたのでした。

シンガーソングライターの竹内まりあの楽曲である「いのちの歌」にあるように、「生きてゆくことの意味、問いかけるそのたびに、胸をよぎる、愛しい人々のあたたかさ……本当にだいじなものは、隠れてみえない。ささやかすぎる日々の中に、かけがえない喜びがある、いつかは誰でも、この星にさよならをする時がくるけど、命は継がれてゆく、生まれてきたこと、育ててもらえたこと、出会ったこと、笑ったこと、そのすべてにありがとう、この命にありがとう」という歌詞ですが、生きてゆくことの意味を問いかける」ことは誰でも、行うことなのです。その問いかけがあって、私たちは信仰生活に入ってきているわけです。ただ、生きる上での基本的欲求の一つである食欲を満たすだけでは、私たち

は生きていけません。自分が何のために生きていくのかという指針がなければ、生きることにむなしさを覚えてしまうわけです。自分が生きていく上で生じた苦しみや悲しみから救われたいというきっかけからキリスト教信仰に入ることもあるわけで、そういう動機から信仰に入ることはよくあることです。けれども、イエスは自分が救われることだけに軸足があるだけでは不完全だというのです。そうではなくて、自分が救われるという恵みに預かった者として、救いをもたらし続けている神のために自分が生きていくという生き方の方向転換が求められていることを本日の聖書個所は教えているのです。もしパンを食べて満足したからイエスを捜しているのならば、ただ自分の欲求が持たされるためだけであったことになります。そうではなく、神のために働き、生きるのです。

つまりは「神のために」生きる生活をすることです。それは、生きていくうえでの価値基準の一番上に神を置くことです。もし、お金が自分の価値基準の一番上にあったならば、生きる手段の一つであるお金によって自分の人生の選択が左右されることになります。けれども、自分の価値基準の一番上に、お金でも自分でもなくて、神を置くことができれば、すべての事柄は相対化されることになり、すべての事柄が相対化されたならば、苦しみや悲しみも神の前では絶対的な力を持つものとはならなくなります。ある意味、自由を手に入れることになります。

永遠の命に至らせる食べ物は、神が与えた荒れ野でのマナの故事にならい、神のパンであるとイエスは言います（３１～３３節）。そこで群衆が『主よ、そのパンをいつもわたしたちにください』（３４節）と言うと、イエスが決定的な言葉である『わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渇くことがない。』（３５節）と断言するのです。神から遣わされたイエス御自身がほかならぬ神のパンであるというのです。イエスが永遠の命を与えるいのちのパンであるということが、ここで明らかにされるのです。

毎月第一主日礼拝に行う聖餐は、イエスが私たち信仰者の糧となる「いのちのパン」であることを目に見えるかたちで表すものです。イエス御自身が神から遣わされた御子であることを聖餐の度に確認するわけですが、飢えることもなく渇くこともないという言葉でわかるように、永遠の命に至らせる存在がイエスであるという信仰的な真理を皆で確認しているのです。本日の説教題は「いのちのパン」と、「いのち」がひらがなです。このひらがな「いのち」によって表されていることは、いのちのパンであるイエスによって与えられている命が個別の生命個体を示す命ではなく、関係性の中にある「いのち」のことを指し示したいからです。イエスは私たちに「いのち」という関係性をもたらしているのです。神に生かされている「いのち」、イエス・キリストによって導かれている「いのち」は、みなひらがな「いのち」です。個別の生命個体としての命が永遠の命になっていくのではなく、天に召されても、神に愛され続ける「いのち」として関係し、存在し続けるから「永遠の命」へと招かれているのです。このことがわからないと、永遠の命のことが不滅の命と勘違いされてしまうのです。イエスが「わたしが命のパンである」と言ったのは、イエスを信じる信仰によって、イエスと分かたれられない「いのち」の関係性の中に入るということなのです。